

ジャグパル

JugPal

2009年6月10日 第44号



インタビュー

【ストレート 松浦 さん】

落語寄席では色物として「曲芸」はつきものですが、たいがいは日本の伝統芸能である「太(大)神楽曲芸」であって、クラブ、デビルスティックあるいはシガーボックスなどいわゆる西洋ジャグリングの道具を使っての演技はほとんど見ることはありません。ましてや「ジャグラー」と称してこれら道具を使って「ジャグリング」を高座で披露する寄席芸人を今まで見たことはありません。

とある落語会のチラシで「ジャグリング・ストレート松浦」という案内を見た時には、ついにジャグリングもここまで進出したのかという思いと、何百年もの歴史ある寄席の世界に西洋ジャグリングの道具を携えて、果敢に飛び込んだこの

"ストレート松浦"なる芸人ががぜん興味をいただき、今回インタビューをお願いしました。



ストレート松浦 さん

名古屋市内の専門学校で演劇を学びつつ、劇団に所属して忙しい日々を過ごしていたある夜、偶然に駅のコンコースでジャグリングを練習している"人"を見かけ、「何だ、こりゃあ!？」と衝撃を受け、その"人"に話しかけたとのことですが。

『後で知ったのですが、大道芸人の「タック!!」さんでした。タック!!さんに話しかけたのは、ジャグリングをやってみたいとか教えてもらいたいとか、そういう目的があった訳ではないんです。何て言うかタック!!さんが作りだしている空間が楽しそうにイキイキと輝いていたから、その中に飛び込みたくて、とにかく話さなきゃ!と思ったままで、「やっていること」ではなく「やっている人」自体に興味を持ったんです。

話のなかでタックさんから大道芸人ロト&ピンゴさん等と、毎週商店街で大道芸をしているので来てみないかと誘われ、それをきっかけに毎週見学に行くようになって、やがて仲間に入れてもらいごくごく自然にジャグリングを教えてもらうようになりました。で、いつの間にかロトさんのハイエースに乗り込んで現場に連れて行ってもらっているうちに、人前でジャグリングを演(や)るようになっていたんです。

ロトさんはジャグリングが上手いのになぜか人前では演らない。なぜ演らないんだろうと不思議でしたが、技術じゃないところでお客さんを楽しませることの難しさを、ロトさんたちの演技を見て学びました。』



寄席にあがるには師匠につかなければなりません。師匠である宮田章司さん（『江戸売り声』で著名な和風漫談家）との出会いは、

『たまたま名古屋にいられていた増岡弘さん（劇団東京ルネッサンスの主宰者、声優としてはサザエさんのマスオ役）に誘われ、彼が主宰している東京の劇団に入ることになり、しばらくは東京と名古屋の劇団を行ったり来たりしていましたが、意を決して東京に引っ越しました。

東京では芝居を続けながらも、劇団で熱心にジャグリングをも練習していたので、劇団に来ていた寄席関係の人たちから口添えを頂いてイベントなどへ出演するようになり、特技であるジャグリングを披露していました。

そんな中、現在の師匠である宮田章司師匠を紹介してもらい門下生となりました。芸の素晴らしさはもちろんのこと、師匠のステージでの立ち姿の格好良さ、そして普段からお洒落で粋なところもとても尊敬しています。でも何と言っても師匠とは巡り合わせという縁があったんだと思います。』

寄席での（西洋式）ジャグリングの評価はどうでしょうか。

『諸先輩の芸人さんはおおかた「ジャグリング＝大道芸」という認識で、中にはジャグリングって何だ？という年輩の噺家さんもおられますが、僕のステージを見てくれた方は気に入ってくれて、「路（みち）の芸ではなくステージの芸になっている。」と仰ってくれます。

寄席はご存じの通り、師弟関係がはっきりとしていて、例えば一日でも早く弟子入りした人が先輩なので、先輩の言いつけに対しては絶対にハイと言わなければならないし、時には人間性を否定されるような厳しい説教も甘んじて受けなければなりません。寄席の世界に入った限り前座さんたちと同じように、しきたりを守って修行しています。楽屋へはあまり早く入ると邪魔になるし、かと言ってギリギリに入ったり、ましてや遅れたりすれば生意気となる。あるいは芸人は人前では練習姿を見せずに誰も見ていない所で練習するもの、練習をしているそぶりを見せないのが芸人だということで、寄席では練習はもとよりウォーミングアップすらしません。

ジャグラーとしてこの寄席の世界で道を切り拓こうとしているわけで、僕しかない現状の中で、僕が嫌われたら道が絶たれてしまうという覚悟でやっています。』

大道芸はしないのでしょうか。

『師匠から禁止されているので、特別なケースを除いて基本的には演りません。「芸人というのは例え3cmでもいいからステージに上がりなさい。ステージでない所で演ってはいけません。」というのが師匠の教えです。それはお客さんと芸人の間に境界をしっかりと作っておかないと、芸人として卑しくなってくるということです。

寄席では、お客さんは芸人の一挙一動を見ていて、芸人のちょっとした振る舞いにも嫌悪感を覚えるもので、だからこそ嫌悪感の原因となるものを全て排除しなければならないんです。

ステージに立つ限りお客さん全員に楽しんでもらいたいし、見に来ていただいているお客さん全員を楽しませなければなりません。お客さんはそれぞれにいろいろな経験をしているいろいろな人生を歩んでいるからこそ、その人生から見て価値のないことをしないようにすべきなんです。



ステージではお客さんから先にお金を払って頂いているけれど、一方大道芸は楽しければ見て、興味がなければ立ち去ればいいので、お客さんを集めるのは大変なことだけれども、お客さんからお金を取らなくて良いというのはある意味楽なことだとも思います。大道芸とは前提条件からして違うのではないかな。』

演技に対するこだわりは何でしょうか。

『いつかその道具が減るといいね。もっとしゃべりを増やして面白くなればもっといい芸人になれるね、と言われることがあります。でもそれは仰った方と僕との価値観が違うんです。確かにそれはそれで面白い芸人かもしれないけれど、ジャグラーとは違うし、ジャグラーとして寄席に立つということは僕にとって大事なことです。』

ジャグラーが新しい技を練習するのは、他人がやっているのを見て、凄いか羨ましいとか憧れとか、そういった動機があつてのことだと思うんです。自分が憧れたものをやればきっと皆も喜んでくれるはずで、自分が楽しいと思つたこと、そしてお客さんが楽しいと思うであろうことをすりあわせた上で演ることによって、お客さんが幸せになってくれるんじゃないかと思つています。

ジャグリングが好きなので凄い技術をショーに取り入れたいという欲求はあるけれど、そもそも人間ってというのは自分が経験していないことは共感できない訳で、例えば映画とかドラマでも経験したような場面が出てくれば単純に面白いと感じるけれど、ジャグリングの場合はそうは単純ではなく感情移入しづらいんです。

つまりジャグリングって楽しいと思える範囲が凄く狭いっていう事実があつて、そこを踏まえながら時代の流れを捉えつつ、お客さんにあわせて技術を入れていきたいんですが、技術は入れない方がきつともっと面白くなるだろうというジレンマはあるけれど、でもやはりジャグラーでありたいとはいつも思つています。』

現在年間に130～150ステージ(寄席は定席で40～50)をこなされているとのことですが、例えばジャグリングがもの凄くポピュラーになって、寄席に立たなくても同程度のステージをこなせるような環境になったとしたら、活動の場として「寄席」にはこだわらないのでしょうか。

『"その環境が寄席より魅力的だったら"という前提が成り立てばあり得ますが、僕は寄席の噺家さんたちを尊敬しているし、こんなにも凄い人たちがいるのに寄席にこだわらず、寄席以外で活動できる状況になるっていうのは奇跡的な状況であつて、(そんな状況を)正直想像できないですね。』

ジャグリングの魅力とは何ですか。

『ジャグリングの楽しさってすごく原始的なものだと思うんです。何かをやる時にそれがどんな些細なことであれ、楽しさって絶対的に存在して、幸せを感じる事であると思うんですよ。人間って幸せを感じるようにできているんです。』

例えばムシャクシャして走ったらスッキリするとか、人を抱きしめると幸せな気分になるとか、何か行動することによって心が動くんです。逆もありえますよね。心が動くと身体が反応するといった具合に。だから心と身体はつながっていて、ジャグリングにはそんな原始的な楽しさが埋まっているように思つています。

何でも楽しいことはその中に存在して、それを感じられるかどうかは人それぞれなんでしょう。たまたま僕はジャグリングを凄く楽しいと感じる人だったんです。



またジャグリングは、練習したら自分で上手くなったのがちゃんと分かるし、練習しなかったら上手くなっていないのも分かる。本当は練習していないのにそこを隠して、さも練習したかのようにお客さんにウソについて信じてもらったとしても、自分だけがそれがウソだって分かっていて、そのことを自分のショーが自分にどんどん突きつけてくる。逃げ出したい時もあるけど、でも逃げ切れなくてそれが辛いという訳ではなく、凄くやりがいがあるって何より人が喜んでくれて、人が評価してくれるのが嬉しいんです。』



厳しい修行のおかげでしょうか、礼儀正しく背筋を伸ばして、でも物腰は柔らかく、真っ直ぐに目を見て始終笑顔でにこやかに八キ八キとした物言いに、このオジサンの目線としては「娘婿にしたい芸人ナンバーワン」といったところでしょうか。(爆)

『人間が好きなんです。』インタビューの冒頭に口から出た彼の言葉そのものが彼自身を、そして彼の演技自体を表しているようです。

芸能の世界で一流の人たちと触れあいながら、緒についたばかりのジャグリングにはまだまだ発展する余地があると信じ、ジャグリングを芸能の世界でこれからどう化けさせるのか、その可能性に向かって「ストレート松浦」奮闘中！

[安部 保範]



モンゴルサーカス団の仲間たちと

【おまけ】

ストレート松浦さんは、何と半年間モンゴルの国立サーカス団に留学していたそうです。

柔軟、筋トレ、吊り輪、倒立さらにはアクロバットなど、ハードな練習の成果として、定例公演で演技したりと充実した日々を過ごされたとのこと。

留学したことにより、やれば何でもできるという自信を身につけ、言葉の通じない国で必死にコミュニケーションを取ろうとしたことで以前より人を見るようになり、言葉の使い方が全く変わったとのこと。実際、帰国してからはショーでのお喋りが以前より上手くなったね、面白くなったねと言われたそうです。

編集後記

四月下旬に長野に行ってきました。七年に一度の盛儀、善光寺の御開帳が執り行われていました。七年に一度、前立本尊(まえだちほんぞん)のお姿を拝むことができ、その阿弥陀如来像の右手と本堂前の回向柱(えこうばしら)が綱で結ばれており、この回向柱に触ることは前立本尊に触ることと同じで、その功德ははかりしれないとのことなので、皆さんも右の写真に写っている回向柱をナデナデして下さい。イイことあるかも

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト: JugPal <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: misc@chansuke.net



善光寺 本堂



禁断のジャグリング

ジャグリング愛好者って無人島に行っても、ヒマしないかもしれない。小石を拾ってトスして、それらをツル(植物)に結びつけてポイやメテオしたり、木材を回してスウィングしたり、薪でトーチしたり、流木をチンバランスしたり、石や岩を絶妙なバランスで積み上げる“Rock Balancing”で楽しんだり…んなワケないか。(汗)

でも、日々の生活で何か物を見れば重心はどこだろうと考え、手でつかめる物は投げ上げたり、細長い物は回したくなったりと、とにかく物と一緒に戯れたいという“曲芸中毒者(親しみを込めて言ってます)”は結構いらっしやるのではないのでしょうか。こういった人たちは往々にして好奇心旺盛で、人と違ったことをやりたがり、ボールやクラブなどの従来の道具では物足りず、常日頃から新しい道具による変化を求めていることでしょう。ここにジャグリングと共通点が多く、中毒者たちにとって気にかかるであろうパフォーマンスの類をここにリストアップしてみました。

併記した団体がそのパフォーマンスを代表する団体ではなく、調べる際の取っかかりとお考え下さい。

【ポイ】ポイコミュニティ <<http://poicommunity.com/>>

【メテオ】団体無し？ポイと同じく馴染み深くなってきました。

【フラッグ(旗)ショー】団体無し？パフォーマンスとしての認知度向上中。

【フットバッグ】日本フットバッグ協会 <<http://www.footbag.jp/main.php>>

【フリ - スタイルフットボール】日本フリースタイルフットボール協会 <<http://jffa.jp/>>

【パトントワリング】パトントワリング情報ポータルサイト <<http://www.twirlers.net/>>

【フレアー・バーテンドینگ】全日本フレアー・バーテンドーズ協会 <<http://www.fba.jp/>>

【ヨーヨー】総合ヨーヨー情報サイト <<http://www.yo-yo.jp/>>

【独楽回し】カイトン空間 <<http://grct.mikosi.com/>>

【けん玉】けん玉こだわりどっとこむ <<http://kendama.com/>>

【皿回し】日本皿回し協会 <Webサイト無し?>

【シャボン玉】団体無し？結構テクニックが必要。

【Wild West (ムチ)】日本スポーツウィップ協会 <<http://www.sportswhip.com/>>

【Wild West (トリックロープ)】団体無し？Wild West Arts Club <<http://www.wwac.com/>> 参照。

【Wild West (ガンブレイ)】団体無し？Wild West Arts Club <<http://www.wwac.com/>> 参照。

【Throwing Art (フライングディスク)】日本フライングディスク協会 <<http://www.jfda.jp/kyougi.html>>

【Throwing Art (ブーメラン)】日本ブーメラン協会 <<http://www.jba-hp.jp/>>

【Throwing Art (カード投げ)】団体無し？日本ではスピリット百瀬さんが第一人者。

【スポーツスタッキング】世界スポーツスタッキング協会 <<http://www.wssajapan.jp/>>

【ダイススタッキング】団体無し？最近は大道芸の人寄せでもよく見かけますね。

【ペン回し】日本ペン回し協会 <<http://www.pen-spinning.org/>>

【フィンガーボード(指スケボー)】団体無し？こりゃまたユニーク。(^^)

【中国武術】各種武器を自由自在に操る技はジャグリングに相通じます。

【大(太)神楽曲芸】ご存じ、日本の伝統芸能。

どうですか、まだまだありそうですが、興味をひかれたものはありましたか？それにしてもここ数年でこのような曲芸的なエッセンスあるパフォーマンスの中毒者は飛躍的に伸びたような気がします。

さて実はここにもうひとつ紹介したいものがあります。恐らく新しもの好きの曲芸中毒者が目をつけるであろう身体の動き、それはマジックの技法(テクニック)です。

カード(トランプ)やコインを使ったマジックでは、演者は観客には気づかれないように、秘密の技法「スライハンド(Sleight of Hand)」を駆使して不思議な現象を起こします。実はこの技法の中にはジャグラーが興味をひくようなものもあり、マジシャンのひとつの技法を身につけるために鏡に向かってスティックに、何週間もあるいは何ヶ月も練習する様は、ジャグラーのそれと通じるところがあります。ただし当然ですが、このスライハンドは決して人に見せることはありません。それがパフォーマンスとしての曲芸との大きな違いです。

しかし技法の中には秘密でないものもあります。「フラリッシュ(fourish)」と呼ばれるもので、例えばカードを滝のように手から手へ落したり、コインを指先で転がしたりと、マジックの演技にスパイス的に華を添えませんが、反面道具と自分はこれほどまでに一体化しているとばかりに、自分の器用さを誇示しかねないというマイナスの側面もあります。つまりフラリッシュという技法は見せるためのテクニックであって、不思議な現象を引き起こすためのものではありません。

従ってこのフラリッシュに間違いなく中毒者は心をくすぐられるでしょうから、機会があればチャレンジしてみるのも一興でしょう。フラリッシュを見た観客は、ジャグリングを見た時と同様に、凄い！器用ねえ！と驚きます。実際IAの機関誌であるJUGGLE(2003年/vol.5 No.4)ではコインのフラリッシュが5ページに渡って解説されていましたし、また毎号掲載されているCharlie Frye(チャーリー・フライ)[註]による「Eccentrics」というコーナーでは、毎回曲芸的な一発芸が紹介され、時折カードやコインによるフラリッシュも取り上げられています。

ではもうひとつのスライハンドは人に見せるための曲芸にはならないのでしょうか。そもそもスライハンドは人に見せるものではないし、見せてはいけないものです。それに(正確な言い方ではありませんが)隠しながらやるので、当然地味い～な動きがほとんどなので、人が見ても何それ？と面白がらないでしょうが、中毒者にはその奇妙奇天烈な手や指の動きに心ときめくことでしょう。

ところが人に見せてはいけないはずなのに、あるスライハンドの一つがテレビで紹介されました。テレビ番組で、とあるマジシャンは演技終了後にネタとして駆使したスライハンドを暴露し、さらにそのスライハンドの技術力の高さを競うために考案したという競技的なゲームを披露しました。このスライハンドはその後(恐らく複数の)別番組でも紹介されています。どうなのでしょう。本来隠しておくべきスライハンドを単独で見せても何ら意味がないどころか害が伴うのみで、まるで舞台前方に黒子を立たせてスポットライトをあてるようなものです。

スライハンドは、曲芸中毒者にとっては魅力的なものだと個人的には思っているのですが、マジックのネタそのもので決して見せて楽しんでもらうものではないのです。曲芸心がうずいてやってみたいけれど、人には見せてはいけない…すなわちこれぞ【禁断のジャグリング】。(^^)

最近のマジック界を見てみると、フラリッシュを含めたジャグリングなどの曲芸的エッセンスを演技の中に多用するケースが非常に多くなってきました。マジックの技法(スライハンド)を解説したDVDは以前から市販されていますが、ここ数年の兆候としてはフラリッシュを解説したDVDが次から次へと異様なほど出回るようになったと感じています。中にはフラリッシュとスライハンドの境界がなく混同されているものも見受けられます。マジシャンをはじめ、曲芸中毒者の方々には、マジックという芸能の特質を考えた上で、マジックの技法とは正しくお付き合い願いたいものです。

マジックとジャグリングのコラボレーションはこれからもさまざまな形をもって試されると思いますが、マジックとジャグリングの関係は夫婦の関係に似ていて、未長く仲良くやっていくには適度な距離感と気遣いが必要だと実感しています。来年銀婚式を迎え、それ以上に長いお付き合いのマジック&ジャグリングファンのおじさんはそう思うのでした…。(汗)

[註] Charlie Frye <<http://www.chariefrye.com/>> はジャグリングやマジックを織り交ぜながらのフィジカル・コメディを演じるボードピリアンで、JUGGLE(1999年/vol.1 No.4)で特集され、I.B.M(世界最大級のマジック組織)のコンベンションでも時折出演しています。ちなみにジャグパル22号では彼のDVDを紹介しています。

[安部 保範]





ブログ風アート見物記

【2009年3月～2009年5月分】

小林美樹ファーストリサイタル(3月6日/横浜市栄区民文化センターリスホール)

クラシックリサイタル。才能溢れる高校生ヴァイオリニストの初の単独リサイタル。数々の国際コンクール入賞も果たしたり、TV番組「題名のない音楽会」へ出演したりと注目株。バッハ、シューベルト、ブラームス、そしてラヴェルの名曲ぞろい、ヴァイオリンソロの魅力をたっぷり堪能。演奏の実力度合いとは裏腹に、舞台を歩くその様には初々しさを感じる。(言い換えると舞台での歩き方や何気ないちょっとした仕草で、アーティストの経験度合いが分かるものですね。)

シルク・ドゥ・ソレイユ「コルテオ」(3月7日/原宿・新ビッグトップ)【写真】

サーカス(シルク・ドゥ・ソレイユ)。演技が始まってしばらくすると何か落ち着かない自分に気づく。円形のステージを串刺しにするように「橋掛り(能舞台)」のような通路が左右に伸びていて、上手から下手からとパフォーマーたちが出入りする様はもはや固定観念的なテントでのサーカスではなく、劇場で催される演劇といった感じ。テントでのサーカスという意識で足を踏み入れたことに対する勘違いと気づく。こりゃまさしく劇場だ。コルテオ



コルテオのテント

はイタリア語で「行列」を意味するとのことですが、「橋掛り」が能・狂言では旅の工程の長短を表したり、神や霊などの異次元世界との接点の空間を象徴したりするものならば、「橋掛り」を意識した訳ではないだろうが、このステージの作りは主人公が死んでもなお夢とも現実とも区別つかない中で、自らの人生を回顧し、かわらではパレードが繰り広げられるという情景にまさしくマッチしていた。ところで演目のひとつひとつは相変わらず驚嘆に値し素晴らしく、個人的には特に「ラダー」がお気に入り。また来ようっと!

ジンガロ「バトゥーダ」(3月13日/木場公園内ジンガロ特設シアター)

ジンガロ。世界各地の民族文化をモチーフとした作品が次々と発表されるが、今回の対象はルーマニアの「ロマ(移動型民族)」。ちなみに前回の初来日公演「ルンタ」はチベット僧侶とのコラボレーションだったが、今回の方が断然親しみやすかった。思えば初めての海外出張がルーマニアで、現地のカウンターパートの方に連れていかれたお店でアコーディオンで生演奏されていたのが、ロマの音楽だったかどうかは今では知るよしもないが、首都ブカレストの夜は街路灯もほとんど無く、野良犬が目立ち人影もなくひっそりとした薄暗い灰色の世界だった。でもここでのルーマニアは、音楽はあくまで陽気で明るく楽しく踊り出したくなるような雰囲気、結婚式などロマの祝祭の様を疾駆する馬と共に華やかに、時にはユーモラスに表現し、サーカスの原点である曲馬の世界をも楽しむことができた。全く関係ないけれど、名曲「ツィゴイネルワイゼン」というのは「ロマの歌」という意味だそうです。

ブルーマン(3月22日/六本木インボイス劇場)【写真】

舞台公演。2回目の来館。2回は来ないと思っていたが子供らが観たいというので家族4人揃っての久しぶりのお出かけ・お出かけ 二列目ど真ん中という最上の席で、ステージから食べ物や何やらかんやらが飛んでくるというのでポンチョシートを羽織っての観劇。相変わらずのハイテンションで、これでもかこれでもかと繰り出すサプライズの数々。このテンションをもう2年半も持続しているというだけでもオ・ド・ロ・キ!



ブルーマンの専用劇場

映画「リリイ、はちみつ色の秘密」(3月28日/日比谷TOHOシネマズシャンテ)

映画。幼い頃に過って母を死なせた罪悪感を負って、母の足跡をたどる旅に出て、黒人の3姉妹が経営するはちみつ農家で、生活を共にしながら心の再生をなしていく少女の姿を描いた作品。監督・脚本が女性監督だけあってのことか、登場人物ひとりひとりの心情が丁寧にきめ細やかに描かれ、女優ひとりひとり演技が見事に輝いていた。

柳家花緑・独演会「花緑ごのみ」(4月3日/葛飾かめありリリオホール)

落語。前座やゲストも無しで文字通り一人きりの独演会。仲入り後には多少笑いを交えつつの趣味のピアノ弾き語りを披露し、最終曲は笑い無しの「ハナミズキ(一青窈)」を熱唱。ん～、何で演芸会に来てプロでもない人がマジに歌い上げるポップスを聞かにかあかんの!? テレビ・ラジオや演劇で活躍し多芸で多彩な才能があるのは分かるし、噺ももちろん断然上手いけれど、なぜか"こなしている"といった感じを受けてしまった。もっと噺に味わいが欲しい。

横浜にぎわい座・爆笑芸芸会(4月5日/横浜にぎわい座)

芸芸会。シュールなコントの「3ガガヘッズ」、私が大々好きな時代劇コントの「コント・カンカラ」、今回のインタビューの「ストレート松浦」、冗談音楽の「ポカスカジャン」、そしてトリはいいよねえ～あの独特なちゃらんぼらんな受け応えで笑わせる漫才「昭和のいる・こいる」。ストレート松浦さんは、いわゆる西洋ジャグリングの道具(ボール、シガーボックス、デビルスティック、クラブ)をベースにしたジャグリングショー。なるほど、確かに大道芸ではできない演出と工夫がされているし、寄席という空間を味方につけているといった感じでお客さんには大好評だった。

よこすか芸術劇場オーケストラコンサート(4月12日/よこすか芸術劇場)

クラシックオーケストラ。ヤバイっす、クラシック音楽業界。不況が企業の文化支援を中止に追い込んで、例えば今回の「交響楽団も某大手外食産業からの億単位の支援を打ち切られたそう。不況という要因のみならず、市町村合併でひとつの自治体が複数ホールを持つようになり予算が縮小されたり、指定管理者制度の導入で集客の面でクラシックは敬遠されたりと小泉改革後の歪みによるものなのか。不景気だからこそ情操を育む文化政策が必要だし、継続的な支援も必要はず。皆さん居酒屋に行く回数を減らして劇場に行こう。

ヨコハマ大道芸(4月18日/横浜イセザキ会場)

大道芸。綱渡りと言ったら王輝さん！相変わらず高～く飛び跳ねていた。張悦さんのボールジャグリングは、中国で流行っているのだろうか、タップと組合わせたルーチンで、バウンスしながら簡易ステージの階段を上り下り。段海波さんの3ボールは何十ものトリックのオンパレードで、メインのバドミントンのラケットによるジャグリングは、バドミントンラケット独特の回転が面白い。進藤一宏さんは、メインはJAプログラムに7ボールを追加したもので、投げ銭を「豊で入れる」とDVDとボール3ヶをくれるというので、人目を気にせずに猛ダッシュしてゲット！おおっ、ボールってロシアンボールじゃないの。

春狂言2009・東京公演(4月18日/国立能楽堂)【写真】

狂言。京都茂山千五郎家一門による大蔵流狂言。恥ずかしながら初の体験。あえて何の予備知識も持たずに出かけ、全てが興味津々。「文荷」と「六地藏」は何となく分かってところどころクスツとしたりしたが、「釣狐」は正直辛かった・・・ちんぷんかんぷん。笑いだけなら落語(寄席)で十分はずなのに、何が何百年もの間、人々を魅了してきたのだろうか。不思議世界に惹かれていく。



国立能楽堂

スペクタクルアート劇団「ラ・マシン」(4月19日/横浜日本大通り)【写真】

イベント。フランスの劇団「ラ・マシン」の機械仕掛けの巨大マシンの二匹の蜘蛛が、横浜開港150周年記念イベントにあわせて、日本大通りをパレードするのは一日限りであって勇んで出かける。クレーン車の上に蜘蛛が乗っかっていて、車両を運転する人、八本の脚の操る人などで15人位がマシンに搭乗。蜘蛛の後には、フォークリフト5～6台に分乗した弦楽器、管楽器、打楽器などの音楽隊が生演奏を披露しパレードを盛り上げる。こりゃまた音楽が素晴らしく(ハーブまである！)聴き入ってしまい、音楽を聴きながら、摩訶不思議な巨大蜘蛛の行進する様を眺めながら、自分自身が雑踏の中に溶け込んで同化していくような妙な感覚に陥る。楽しいが、しかしながらいつも割り切れないものが残る。地域密着の文化活動を支援している地元施設への信じがたいほどの予算削減が強い現場の方々のご苦勞を思うと、これら相当な支出を伴うアートイベントの意味合いが何なのか行政担当者は真剣に論議して欲しい。そしてその内容を公開して欲しい。



ラ・マシンの蜘蛛(でかいよ～！)



あわわ、踏みつぶされそー！



リフトに楽団が乗って演奏



こんな感じで人が蜘蛛の脚を操縦しています

国際サーカス村協会・例会(4月24日/千駄ヶ谷会館)【写真】

国際サーカス村協会の例会。今回のゲストはコレテオのアーティスト総勢6名！会員の質問ひとつひとつにアーティストの皆さんからは丁寧な答えをいただき、大満足の座談会。コレテオは5～6年の準備期間を経て、2005年4月21日に初演を迎えてから4年にもなり、1,480回の公演でリトルクラウンの男女の二名は休むことなく出演されているとのことで驚き。確かに彼ら無くしてコレテオは成り立ちませんからね。お二人のお話の中で、ヴァレンティナさん(女性)からはヘリウムダンスでのハプニングが聞け、グレゴリーさん(男性)が伝統的なサーカスとシルク・ドゥ・ソレイユとの違いについて、伝統サーカスは『生活』であり、シルクは『ショービジネス』と言われたことが印象的でした。(演出も衣裳も食事も全て自分が決めていくことに対して、演技のみに集中すれば良いという違い。)

アキット(4月26日/長野駅)【写真】

長野駅のコンコースで、ディアボロを練習している青年を見かけたので話しかけてみた。彼は長野県を中心に活躍されている

「魔法使いアキット」さん。

(ブログURL)<http://akitto.blog.so-net.ne.jp/>

ジャグリング、バルーン、マジック(クローズアップからイリュージョンまで!)と幅広く手がけられて、長野県でも珍しいプロのパフォーマー。私の興味の対象全てがそこにあり、話の弾むこと弾むこと演技を拝見したことはないが、楽しいパフォーマンスで長野を夢の世界に変えちゃってください。頑張れ。

キグレサーカス長野公演

(4月27日/しなの鉄道千曲駅西側特設会場)【写真】

サーカス。長野県千曲市での公演。サーカス学校卒業後、モスクワのサーカス団へ、そして現在はキグレサーカスで活躍中の香山啓さんの演技が楽しみ。(ジャグパル35号参照)啓さんは公演序盤で登場。簡易ステージの階段を一輪車で上り、一輪車上でリングと縄跳び、そして一気に階段を一輪車で下りするという演技。テクニックとしては以前とは比較にならないほど安定していて、これまでの努力の成果と経験はきっちりと舞台に出てくるものだと感じた。もう一人、サーカス学校卒業生(高橋奈々さん)がここに入団していて、残念ながら今回は彼女の姿をサーカスリンク上で見ることはできなかったが、お二人とも元気で、生徒さん達の成長ぶりを見るのはとても嬉しい。

池田満寿夫美術館(4月27日/長野市松代町)【写真】

美術鑑賞。キグレサーカスの帰りに立ち寄る。あらあらこんなところに池田満寿夫美術館があったんですね。画家、版画家、挿絵画家、彫刻家、陶芸家、作家、映画監督、はたまたタレントと多岐にわたる活躍とその多彩な才能で“時代の寵児”となった彼の足跡を作品と共にたどることができた。常に変化し続ける、日本には希有なもの凄い芸術家だったということを確認。

余談ですが、松代町は香山啓さんの実家(ファッションパーク・カヤマ)があるので、誰に頼まれた訳でもないのですが、勝手にお邪魔してお父様とお話して来ちゃいました。(汗)



アーティスト6名と会員と



練習中のアキットさん



キグレサーカスのテント



池田満寿夫美術館

KOKIAワールドツアー2009「 」(4月29日/渋谷オーチャードホール)

コンサート。知る人ぞ知る女性シンガーKOKIA。彼女を知ったのはTV番組「カワズ君の検索生活」内で「泣ける2ちゃんねる」の話を紹介する際に、BGMで流れていた彼女の楽曲「ありがとう」を聞いた時。それ以来気になって、CDも買って、コンサートに行く機会を狙っていた。熱狂的なファンが多そうなので、冷やかし程度で行く私なんかは注意した方がいいかと思っていたが、いやいや正直驚いた。皆、微動もせず、曲の一言一音、歌詞の一字一句をも聞き逃すまいと全神経を集中しているようで、はやくも2曲目にはハンカチを取り出す人やすすり泣きの声が…。歌はメチャ上手く心に訴えてくるし、歌詞は聴衆それぞれの人生に重なるような言葉で揺さぶってくるし。恐るべしKOKIA。

PE'Z ツアー大作戦！(5月1日/恵比寿LIQUIDROOM)

ライブ。我が家では私と娘がPE'Zのファン。今回は家族4人でお出かけと思いきや娘は都合によりキャンセルだが、めげずに中年夫婦と息子の3人でライブハウスへ。当然中年夫婦はこんなライブハウスは初めてで、恐らく聴衆の中ではダントツで最年長者だろうな。表彰してもらいたいくらいだわ、この勇気と無謀さに。すし詰め状態でオールスタンディングの中、それでも隅の隅で楽しむ。PE'Zのジャンルはジャズとかスカとか評されるが、私にとっては断然ロック！音楽的なことではなく、腹の底から瞬間的に噴火の如く沸き立つ熱いものを感じるこの感覚は、伝説ロックバンド・クリーム(中年の私にとっては伝説ではないけど ^_^;)の演奏を聞いた時の感覚に近い。クラシックのオーケストラを聴く時のじわじわとゆっくりと熱くなる感覚ではなく、突発的なんだわ、これが。エリック・クラプトンのギター、ジャック・ブルースのベース、ジンジャー・ベイカーのドラムとこの3人が繰り出す自我や個性丸出しの丁々発止の演奏は、まるで「(ルール無き)けんか」と「スポーツ」の境界を行ったり来たりするようで危うく、スリリングで鳥肌が立つものだった。そんな感覚と共通するものがある。PE'Zには、PE'Z最高おっ！！

シルク・ドゥ・ソレイユ「コルテオ」(5月5日/原宿新ビッグトップ)

サーカス。私、偉そうにサーカスについていろいろ書いているが、サーカスを見始めてまだ二十年足らずなので、80回程度しか公演に足を運んでいない。(十分か ^_^;)そのうち日本全国を移動している三大サーカスで言えばキグレサーカスは4回、木下サーカスは4回、ポップサーカスは6回で合計すると14回。一方シルク・ドゥ・ソレイユは1992年のファシナシオン以来18回で、日本のサーカステントへの来場回数を上回っている。たかだか十数年でのシルク・ドゥ・ソレイユの発展ぶりにはただただ驚嘆あるのみだが、一方二十年という時間を感じさせないほど日本のサーカスはゆったりと時が流れているようで変化に乏しい。まさにこれが『生活』のサーカスと『ショービジネス』のサーカスとの違いなのか。まあ、どっちのサーカスも好きなんで共存共栄でいって欲しいな、なんてチョーお気楽に望んでいる私でした。

立川談春(5月29日/三鷹市芸術文化センター 星のホール)

前座は立川こはる。えっ、中学生？小柄で幼い顔立ち、声変わりもしていないような…帰ってネットで調べたら1982年生まれの女性と判明。(失礼しました)嘶の上手さどうのこうのは別にして、何だか気になる存在ではあります。談春の根多二題(不動坊、木乃伊取り)はそれぞれ60分弱とたっぷり聴かせて頂きました。満腹、満腹。

横浜開港150周年記念「ヴィジョン！ヨコハマ」(5月31日/パシフィコ横浜国立大ホール)

宮本亜門作・演出による「歴史と未来」をテーマとした横浜市民約500人が出演した横浜開港150周年記念ショー「ヴィジョン！ヨコハマ～未来へ。そして紡いできたもの～」。全く興味はなかったが、息子がこの500分の1として参加するとの事でお出かけた。舞台では、開港からの横浜の150年の歴史が走馬灯のように表現され、世代から世代へと優しさや逞しさを受け継いでいく大切さが、「人には見たい未来を実現させる力がある」というメッセージと共に力強く謳われる。演技のみの人も含めて、ダンス、スポーツ、音楽などそれぞれに特技を持った総勢500人の集団が、舞台に入れ替わり立ち替わり登場するが、ナビゲーター役の谷原章介と飯島直子をはじめ、草笛光子、五大路子、石井正則、桜塚やっくん、高田延彦、パクン、千住真理子(順不同)といった横浜ゆかりの方々が、要所で出てきて舞台を引き締める。5,000人も観客を飽きさせないスピーディーな場面転換と大胆な視聴覚演出、そして明確なメッセージを持つ内容に、予想外に面白く飽きることはなかった。今という時代のトレンドを的確にとらえたその作りと演出はたいしたもの。またよくぞ500人のある意味素人集団をまとめ上げたものと感心。ちなみに息子はいつもやっている大道芸の相方と共に、ほんの30秒ほどクラブのトスジャグリングをしていたが、何故か舞台を降りて観客席のフロアで投げ合っていた。(^^)

横浜市では、横浜開港150周年記念の各種イベントを(たくさんのお金をかけて)開催中。

<http://www.yokohama150.org/y150/>

[安部 保範]